

『ウィズダム和英辞典』(小西友七(編)、三省堂、2007年)なども「別腹」を取り上げている。

## 5. まとめ

今回は和英辞典を取り上げ、特に「和英辞典の使い方」について説明した。和英辞典を使ってはいけないというのではなく、より効果的に和英辞典を使うために、和英辞典を使った後は、必ず英和辞典あるいは英英辞典で、調べた語が文脈に合致するものかを確かめるとともに、語法を確かめていただきたい。「和英辞典を引いたら英和辞典(英英辞典)」を常に頭の片隅に置いて英語を書いていたいただきたい。

これまで5回にわたり英語の辞書の連載を行ってきたが、楽しんでいただけただろうか。もしかしたら最も楽しんでいたのは原稿を書いている本人だったかもしれないが(笑)、学生諸君の英語学習の一助になれば幸いである。実は辞書好きの私はまだいろいろと書きたいことがあるのだが、また授業でお話できる機会があればと思う。

ら、読みやすく、かつ大人も楽しめる児童書の洋書から、お気に入りの作家、おススメの本やシリーズの紹介をお届けします。

まずは、ケイト・ディカミロという作家の作品に出会って、「英語であっても、日本語で読んでいるように話が頭に残るようになったし、物語を楽しみながら読むことができるようになりました」という森さんが、ケイト・ディカミロの魅力を語ります。森さんは、在学中、数十~二、三百ページ程度の洋書を何冊も読破していた一人です。次は、いろいろなジャンルの、数多くの作家の英語の児童書や絵本をどんどん読んでいた上田さんが、今年の干支にちなんで、著者の発想に思わずくすくす笑える *Bunnacula* を選んでくれました。最後は、絵やイラストが好きで、お気に入りの作家が何人もいる村瀬さんが、英語が苦手な人にもおススメできるという、イラストも個性的な魔法のシリーズ物の登場です。村瀬さんはこのシリーズは7冊ぐらい読了です。

今後いろいろな洋書を紹介していきたいと思いますので、お楽しみに！ (小坂)

ケイト・ディカミロ (Kate DiCamillo)  
2010年度経営学部卒業生 森彩乃

私が最初に読んだケイト・ディカミロの作品は *Because of Winn-Dixie*<sup>1</sup> です。これは、引越して新しい土地にやってきた女の子とスーパーに迷い込んだ犬の話です。この本を小坂先生から紹介していただいた理由は、私が犬好きだから。長めの物語ではありましたが、主人公といつも行動を共にする犬が登場するので、時間はかかりましたが、最後まで読むことができました。この話は、子供向けということもあって単語もそれほど難しくなく、行間も広いし、文字も大きめなので読みやすいと思います。「これから長編にも挑戦していこうという人」にオススメです。

私がケイト・ディカミロに出会ったのはこれが最初ですが、彼女はこのほかにも魅力ある動物が登場する作品を多く書いています。私が読むことが出来たのは彼女の作品の中のほんの一部ですが、それぞれに魅力があり、毎回楽しく読むことができました。

## 洋書を楽しんだ先輩たちが紹介する の洋書 (1)

~短編から中編の児童書や絵本を中心に~

2010年度 経営学部卒業生

森彩乃、上田瑛里、村瀬晶子

法学部

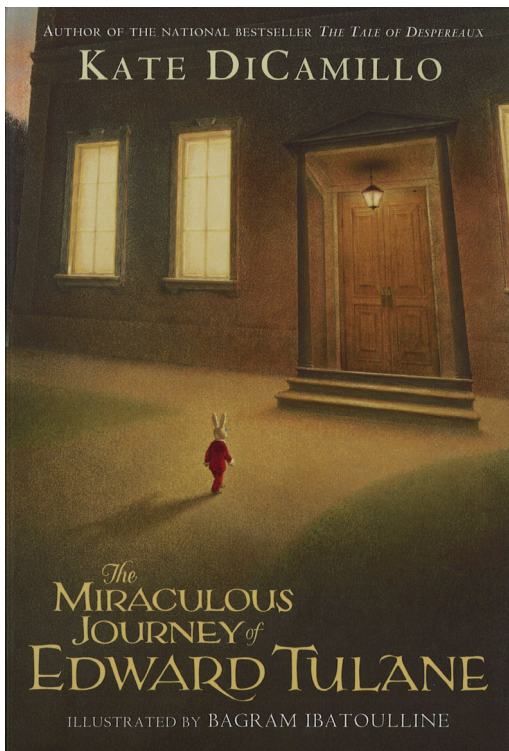
小坂 敦子

洋書を読むのも大好きな私は、電車の中で読んでいるうちに、すっかりひきこまれて乗り過ぎてしまったり、寝る前に少しだけ読もうと思いつつも、「もう1章」、「もう1章」と思っているうちに寝不足になってしまったりします。

今日は、洋書を読むのを楽しんでいた先輩達が

*Mercy Watson*<sup>2</sup>シリーズは、スミス家の飼いブタが主人公の絵本で、絵もかわいい。中には賞を獲得した作品もあります。スミスさんのポジティブさにも笑える、いい作品だと思います。ですが、なぜスミスさんがブタを飼おうと思ったのかは謎です。

次に *The Tale of Despereaux*<sup>3</sup>。これは、お城の中で産まれた小さなネズミの冒険を描いた話です。とても長い作品で、読み切るのにとっても苦勞しました。分からない単語が多かったり、途中で話が分からなくなってしまうたり……。それでも読み切ることができたのは、ストーリーが魅力的で、小さな体で一途に頑張るネズミがかわいいからだと思います。これは、多くの人にオススメできるものではないですが、ファンタジーが好きな人は、挑戦してみるのもいいと思います。最後に近づくほど、バラバラだった話が一つに繋がっていくので、パズルがはまっていくような爽快感があります。



そして、もう一冊。私が一番好きな小説が *The Miraculous Journey of Edward Tulane*<sup>4</sup>です。こ

れは、うさぎの人形・エドワードが、様々な境遇で、様々な国に住んでいる人たちの手を借りて旅をする話です。ファンタジーのようですが、エドワードは話しません。もちろん、自分から動くこともないですが、頭の中で多くを考え、多くの持ち主に愛され、別れを悲しみます。その気持ちは人間のものと少しも違いません。この小説は日本語訳も出ていて、タイトルは『愛をみつけたうさぎ』<sup>5</sup>です。原題からは想像も出来ない訳ですが、物語を読んでいけば、このタイトルにも納得できます。この物語も、児童書に分類されます。それでも、大人が読んで感動できるし、涙を流すことができる作品だと思います。日本語でもかまわないので、ぜひ多くの人に読んで欲しい物語です。

私は、ケイト・ディカミロの作品に出会うまで、ただひたすら本を読んでいるだけでした。しかし、彼女の作品に出会って、英語であっても、日本語で読んでいるように話が頭に残るようになったし、物語を楽しみながら読むことができるようになりました。

短い絵本ではなくて、何か物語を読みたい。そういう人にオススメの作家だと思います。

*The Vampire Bunny*<sup>6</sup>  
*Bunnica and Friends* シリーズより  
 2010年度経営学部卒業生 上田瑛里

今年の干支である卯年に因んで、少し変わったウサギの絵本について紹介します。それは、James Howe 著の *Bunnica* (パニキュラ) シリーズです。パニキュラとは、bunny と Dracula を合わせたもので、つまりウサギの吸血鬼なのです。しかし、普通の吸血鬼と違って血を吸わない代わりに、野菜の汁を吸って生きています。

とても平和で可愛い生き物だと思いませんか？

ですが、何もしゃべらず、昼間は寝てばかり、飼い主のモンロー一家が眠りにつくと、活動的に野菜の汁を吸うパニキュラは、同じペットの Chester (猫) と Harold (犬) に警戒されてしまいます。特に Chester の警戒心とパニキュラに対する想像力は、読んでいて面白いです。

この本以外にも様々なジャンルの絵本があるの

で、きっと気に入るものが見つかると思います。興味があれば、ぜひ *Bunnacula and Friends* シリーズを読んでみてください。

*Winnie the Witch* シリーズ<sup>7</sup>  
2010年度経営学部卒業生 村瀬晶子

私はもともと英語に苦手意識がありましたが、英語の絵本のかわいらしい絵柄の表紙に惹かれて手にとったのが Valerie Thomas 著の *Winnie the Witch* という絵本でした。

らくがき風の絵はとてもユニークで、見ているだけで愉快的な気持ちにさせてくれました。すべてのページが絵で埋められているので、英語が苦手な私でもその挿絵を頼りにどんどん読み進めることができました。魔法のウィニーのへんてこな魔法とそれに巻き込まれる飼い猫のドタバタ劇が繰り広げられていて、毎回どんな魔法が出てくるのか、何が起こるのか、わくわくさせてくれる絵本です。ウィニー達の魔法の世界や飼い猫との友情など、難しいテーマではなく、楽しく気軽に読めるので、英語が苦手だと感じている人にもおすすめしたいです。シリーズ化されているこの絵本ですが、どの巻もカラフルでユニークな絵、わくわくできる魔法であふれています。一冊読んでみると、きっと次々読んでみたくなると思います。

(以下、本文中に登場した本の挿絵画家、出版社、出版年などを記しておきます)

- 1 Cambridge, MA: Candlewick Press, 2000.
- 2 これはシリーズ物で *Mercy Watson to the Rescue* (illustrated by Chris van Dusen, Cambridge, MA: Candlewick Press, 2005) など数冊が出版されています。
- 3 Illustrated by Timothy Basil Ering, Cambridge, MA: Candlewick Press, 2003.
- 4 Illustrated by Bagram Ibatoulline, Cambridge, MA: Candlewick Press, 2006.
- 5 バグラム・イバトーリーン絵、子安亜弥訳、ポプラ社、2006年
- 6 Illustrated by Jeff Mack, New York: Aladdin, 2005.
- 7 Illustrated by Korky Paul, New York: HarperCollins, 2007. なお、このシリーズで10冊以上が出版されています。

## セキレイの心

経営学部  
矢田 博士

### 一、はじめに

愛知県日進市を流れる岩崎川と天白川の土手の上の道を歩いていると、カモやサギ、カワウやシギ、ヨシキリやセキレイ、キジやカワセミなど、様々な野鳥を目にすることができる。

筆者はかつて「岩崎川のカワセミ」(本誌23号、2010年7月、所掲)と題する拙文において、岩崎川でカワセミの姿を目撃したのを機に、カワセミを詠った中国の古典詩歌について紹介した。本稿では、セキレイを詠った詩を取り上げてみたい。

### 二、セキレイの生態および習性

その前に、セキレイの生態および習性について、中国の古典文献を基に整理しておきたい。まずはその外見的特徴について、三国・呉の陸璣の『毛詩草木鳥獸虫魚疏』巻下「脊令在原」の条に、以下のように言う。

脊令、大如鵓雀、長脚長尾尖喙、背上青灰色、腹下白、頸下黒、如連銭。

[鵓雀は、鵓雀(小鳥の一種)ほどの大きさで、長い足に長い尾、尖った嘴を備え、背中中は青みかかった灰色で、腹側は白色、首の下は黒色で、銭を連ねたような模様がある。]

セキレイは、体長20cmほどのスズメ目セキレイ科に属する鳥で、川の土手のくぼみや河原の石の間などに巣を作り、トビケラやカワゲラなどの水辺の昆虫を餌とする。たくさんの種類があるなか